



秘めたる蕾、啄むモノは……。

ツイバミ

〓〓登場人物〓〓

今野真奈 鬼瓦校の生徒。2組。昔虐められていた過去があるが、背が大きくなってからはそれがなくなった。おとなしめな性格。背が高くなるにつれ、胸やお尻もおおきくなっていった。運動は得意というほどでもない。徹とは幼い頃から仲良し。昔は徹に庇ってもらうことが多かった。

高杉 徹 鬼瓦校の生徒。2組。背は小さいけれど運動神経抜群。性格は明るく、人当たりが良い。頼まれごと、頼られると弱い。真奈のことは特別意識していなかったが、女らしくなった彼女を見ていて気持ちが悪きつつある。

武井健介 徹のクラスメート。密かに真奈に気持ちを寄せているが、徹が居ることで距離は縮まらない……。

常盤祐樹 徹のクラスメート。

中倉綾子 1組。何を考えているのかわからない。転校生。

佐々木 百合子 1組。スタイルが良く、クールな美人。水泳が得意だが、伸び悩んでいる。背が高く、気が強いこともあって皆から恐れられている。

柳瀬 愛 1組。明るく少し抜けている。我儘なところがある。百合子や真奈に比べると見劣りするが、スタイルは悪くない。エッチなことにも興味あり。

夕暮れの映える校舎、対照的に暗がりになる体育館のその裏手。  
四人の男女が、一人の女子を囲んでにやにや晒っていた。

―― アンタ、生意気なのよ。

―― 三組の和義君のこと好きなんでしょ、迷惑だからヤメテよね。  
友達居ないクセにさ。

―― 誰もお前の相手なんかしねーよ。

―― お前ってさ、なんか変な臭いするんだよな。

―― うわー、菌がうつる〜。

―― 学校来ないでよ、ウザイしさ。

―― つうかさ、死んでよ。居なくなつて。

―― そうだな、死ねよ。

―― しーね！

―― しーね！

―― しーね！

―― あ、泣いた。

―― ほら、泣いた泣いた！

―― あっはっは！ だっさ〜！

―― 泣けばいいと思ってるの？

―― 誰もあんたなんか助けないから〜。

服を掴まれる。引っ張られる。突きとばされる。  
まるでサッカーやバスケのボールのよう。

―― やめて、やめてよ！

―― あはは、なにかいってる！

―― ボールのクセになんか言ってる〜！

噛い声とすすり泣く声。

―― ん、なにをしているんだ？

見回りでやって来た教員がずかずかと近寄る。

—— なんでもないです。僕たち遊んでただけです。

—— そうです、なのにこの子、なんか泣き出して、すごく迷惑してまーす。

—— ふーん、そうか。まったく……。そんなんだから君は友達ができないんだぞ。ほら、皆にちゃんと謝って！

——……………。

—— 親が親なら子も子か……。ほら、ごめんなさいだ。言いなさい！

教員は女の子の頭を押さえつけ、無理やり下げさせる。

—— ご、ごめん……。なさい……。

—— ふん、こう言ってるし、仲良くしてやれ。

—— はーい！

教員の言葉に女の子を苛めていた子達は笑顔で返事する。

—— お前らも、あんまり目立つようなことはするな。いいな。

視線を合わせずに言い放つと、教員は去っていった。

—— だって。あはは、そうだねえ……。……。

リーダー格の女の子はニヤリと嗤っていた。

休み時間、女の子が教室を出るのを見て、こっそりついていく女子達。

彼女がトイレの個室に入ったのを見て、バタバタと入って、トイレのドアを開け男子達と大声で話します。

—— あれ、誰か個室できばってる？

—— うわ、なんかくさくさい。

—— え、学校でウンコしてる奴いんの？

—— まじで、ありえない。普通しないよね。

—— ウンユ女がいるそうね。

—— あっはっは、うーんこ、うーんこ！

個室を前に嘔し立てる声。中からはすすり泣く声とプピッと放屁の音がする。

—— うわー、くせー！ こいつおならしやがった！

—— あはは、おなら女だく！

—— おならおんなく！！

—— おなら女は臭いから水に流しちやおうく！！

—— それいいな！ よーし！

近くの掃除用具入れロッカーからバケツを取り出すと、水を汲み……。

—— よっしやー！！ 行くぜ！ そりやー！！

バケツをひっくり返し、水を被せた。

—— きやー！！

小さく上がる悲鳴を聞き、再び嘔し立てるいじめっ子達。

—— あっはっは、ずぶ濡れ女く！！ ずぶ濡れ女く！！

給食の時、シチ ユーを食べていると皆が自分を見ている気がした。

ひそひそと晒い合うクラスメート。

早く食べないと思ひ、一気にかき込み、牛乳で飲み干す。

そしてせせらわらういじめっ子達。

不安が纏わりつきながら、早く学校が終わるのを待った。

—— おまえさ、今日のシチ ユー美味しかった？

—— ……………。

—— 美味しかったる？ なあ、お前のシチ ユー特製だもんな！ カブトムシの幼虫、入ってたんだぜ！！

—— ……………！！？

妙な触感があったのを覚えている。けれど、それを口から出せばゲロ女と嗤われる。必死に飲み込んだら、それは虫の幼虫……。

—— あっはっは！ 虫食い女、虫食い女！

気持ち悪さがあるけれど、吐きだすこともできそうにない。

悔しさと悲しさがこみ上げて来て、それが涙になって出ていく。

—— なんで、なんでわたしばかりイジメるの……。

泣きながら、嗚咽交じりに言うけれど返ってくるのはせせら嗤う声だけ……。

—— わたしは、わたしは……。

涙ながらに帰路につく少女。それを嗤いながら後をつけるいじめっ子達。

—— やーいやーい、虫食い女。虫食い女……。

—— やーい、やーい……あ……。

嗤い声が止まると、少女の前に影が差した。

—— ……誰？

涙混じりの視界に誰かが立っていた。

—— 虫食い女ってどういう意味だい？

男の声だった。

—— なんで、そんなにこの子を嗤うんだい？

いじめっ子達は答えなかった。

—— ……お、おい、行こうぜ。なんか変なおじさんが居るぞ。

—— ああ、やっぱりこいつは変だわ。変なジジイと変な女……！

いじめっ子達は自分達の行為を咎めようとしている気配を察し、すつと踵を返す。

——……………ぐず……………。

少女は取り残されていた。わかることは、その男の存在が自分を一時的な窮地から救ってくれたこと。

—— なんだか大変だね。おじさんに色々話を聞かせてくれないか？ その公園でいいよね。

眼鏡をかけた男性はよく見るとおじさんというにはまだ十年以上猶予がある。それにもかかわらず自分をおじさんというのはなぜなのか、少女にはわからなかった。

公園でブランコに乗りながら話をする女の子。

おじさんはうんうんと頷いて聞いてくれた。

ときおり女の子のする質問に、おじさんは難しい言葉を並べて答えた。彼は教育について大きな学校で勉強をしているそうだ。

毎日イジメられて、生きるのが辛い。ジサツしたい。

そういうと、おじさんは悲しそうに言葉を詰まらせた。

そして、立ち上がると少女の前に座り、ペンを取り出した。

—— 君にこれを貸してあげる。君がいじめられたりしたら、そのことをこのペンで日記に書いておいてほしい。

—— うん。

—— そしてね、虐められて辛いと思う。けど、その時はこのペンを強く握って我慢してね。いつかきつと、神様が君を助けてくれるから……………。

—— うん。

少女は不自然に重いペンを持ち、おじさんと別れた。

次の日も、その次の日も、少女はイジメられた。

少女はおじさんに言われた通りにペンを握り、日記を書いた。  
今日、誰に苛められた。こんなひどいことをされた。悔しい、悲しい、辛い……。

何度それを繰り返しても、神様は助けてくれない。

どうせあのおじさんも嘘をついたのだろう。

自分はなんて不幸なのだろう。

そう思った。

—— やーい、やーい、ウンコおんな、おなら女〜！

—— ひっく、ひっく……うええん……。

その日も少女はイジメられていた。

家の近くまで続く罵詈雑言に、涙はとめどなく溢れて目が腫れぼったくなる。

悲しくて、辛くて、もう死んでしまいたい。

そう思っていた。

—— うわ、また出た！！

—— おい、行こうぜ！！

—— じゃーな！ 変な女！ もう二度と学校に来るなよ！！

—— ……うそつき。こんなペン、いらぬ……。

少女は顔を上げると、そう告げ、ペンを突っ返した。

—— 嘘じゃないよ。

おじさんは彼女からペンを受け取ると、手を出す。

—— 日記、あるかい？

—— 家。

—— そう。じゃあ、ちゃんとしまっておいてね。

.....

神様が助けてくれるなんて……。

嘘つきおじさんはやっぱり変なおじさんだけだったんだ。

そう思い、少女はおじさんの横をすり抜けて家路についた。

変なおじさんは、どこかで見たことがあるような気がした。

最近、この前ではなく、つい最近。どこでだろう？ わからない。でも、どうでもいい。

そう思った。

次の日、学校へ行くと担任の先生が居なかった。

自分を苛めていた子も居ない。

どうしたのだろう。

わからなかった。

その次の日も担任の先生が居なかった。

代わりに来た教頭先生が自分の名前を聞き、担任の先生について軽く聞かれた。

次の日も、またその次の日も、やっぱり担任の先生は来なかった。

教頭先生は同じようなことを繰り返し尋ねてくる。

最初はいろいろ話せなかったけれど、ひとことほろりと呟いてしまうと、それをしつこく尋ねられた。根掘り葉掘り聞かれてしまい、いろいろ答えてしまう。

その内に視聴覚室へ呼ばれ、そこで他の先生、それに母まで同席されて話を聞かれた。

そして、そこにはなぜか自分の日記があった。

人の日記をなんで！ と思い、恥ずかしくて真っ赤になった。そして返すように言うも、教頭先生は目をぎゅっとつぶり、頭を下げた。

—— 私は本当にバカな教師だった。本当にごめんね。君がこんなに辛い思いをしているのに、すまなかった……。

普段、顔を合わせることもほとんどない。せいぜい登下校の時に笑顔で挨拶をしてくれるだけの存在の教頭先生。

それが一体何を、何について謝っているのだろうか？  
少女はわからなかった。

—— あの、どういうことですか……。

—— これからは君が悲しまなくて良いよう、私たちは教員としての仕事を全うすることを約束する。

—— ええ、はあ。

言葉の意味はよくわからないが、日記のことをみて、自分の虐めのこと知られたのだろうと察した。

視聴覚室にいじめっ子達を通された。

彼らは頬を腫らし、真っ赤な目で涙を流していた。

彼らの親御さんたちが険しい表情をしながらいじめっ子達の傍に立ち、耳を引っ張って少女の前に連れていく。

—— ほら、言うことがあるだろ。

—— うう、ひっぐ、ご……、ごめんなさい……、ごめんなさい。

—— 何について謝ってるんだ、しっかり言いなさい。お前のしてきたことだろ！

—— うええん！ ごめんなさい！ ぼく、きみの悪口ばかりいって！ 給食に虫まぜたりしてごめんなさい！ もうしないから、ゆるしてください！

—— ごめんなさい、あたし、あなたに酷いことして、ほんとうに反省するから、だから、ごめんなさい！！

—— ぼくも、きみのこと虐めてごめんね。ぼく、あそんでたつもりだけど、すごくひどいことしてて！ ほんとうにごめん！

口々に謝るいじめっ子達。それは謝らされているのだろうけれど、彼らもそれなりの罰を受けたのだろうか。そしてしばらくは咎を受けるのだろう。

—— このたびは本当にごめんなさい。親として子供をしっかり教育せずにお子さんに迷惑をおかけして……、なんて言葉をかけていいのか……。汚した服や文房具、壊したり隠したりしたものとあれば、弁償をさせていただきます。

—— はい、まさかこんなことになっているなんて……。私も母として娘を守れずに……

…。貴方達には相応の償いを求めます。どうか、娘の前に姿を見せないでほしいです。そして、今後二度と誰かを傷つけるようなことをしないようにお願いします。

—— わかりました。近いうちに善処いたします……。

親同士の話はよくわからないけれど、一つ、わかったことがある。

—— 神様がなんとかしてくれたんだ。

喧騒ひしめく体育館、弾むボールの音と、その行方に一喜一憂する声援。鬼瓦校の旧体育館に響いていた。

鬼瓦校では必ず何かクラブに所属させられ、隔週水曜日・金曜日の放課後に活動を行う高杉徹は、友人に誘われてバスケットボールを選択していた。

「リバウンド！」

放物線を描くボールを目で追い、それがリングに嫌われるより先にフォロローを始める。俊敏性、洞察力、動体視力、いずれもスポーツマンに必須とされるスキルを持つ彼は、周りの誰よりも早くボールの落下地点へと向かっていた。

「カット！」

けれど、悲しいことに背丈は彼を見放しており、同級生、それも女の子に身長差で遮られてしまう。さらに彼の届かぬ空中でのボールのやり取りでゴールを決められてしまった。

「あがれ！ もっと！」

それでもめげずにゲームを続ける徹は、必死でチームメイトに指示を出し、パスターゲットを探す。だが、どの一人をとつてもディフェンスに頭一個負けており、さらにおしつけられたりと、間を縫うことはできそうにない。

今、徹の目の前に居る女子、井上美代子は彼を見下ろすように立っていて、そのパスをこの試合だけで五回以上カットされている。

「健介！」

一人ガードを抜けたチームメイトの名前を叫ぶ徹。しかし、そんなことをすれば健介のもとへディフェンスが集まるわけだが……、

皆の視線が健介に移った瞬間、徹は視線も動線もぶらさず、ディフェンスの外れた別のもう一人のチームメイトへとボールを投げた。常盤祐樹へのパスは難なく通り、そこから速攻を仕掛ける徹達。

校内のお遊びクラブ。まともな指導もなくボールに群がるか、パスターゲットを妨害するか、背丈だけで勝負が決まるゲーム。徹達に勝ち目などないのだが、せめて一回でも相手のゴールネットを揺らしてやりたいと考え、必死で相手の裏をかいた。

「相原！」

一番ゴール近くに居たのは相原奈々。彼女は徹よりもさらに小さい子で、運動神経も悪い。マークフリーではあるが、それはむしろ相手にされていけないからこそそのフリー。

祐樹は彼女へとボールを回すが、その勢いに怯える奈々はそれを受けるところか頭を庇ってしまふ。

「馬鹿！」

なんとか追いついた徹はボールに飛びつくようにカットするが、零れたボールは相手チームに拾われる。

誰も守らないコートを走る相手チームメンバーは、悠々とゴールを決めてスローインを

待っていた。

祐樹は奈々を睨みつけたあと、まだ残る十分、苛立ち紛れにゲームへと戻った……。

\*\*\*

結果は二十八対〇。

屈辱的なのは相手が全員女子で、徹のチームは、健介、祐樹、奈々、志村昭の男子四人、女子一人。男子が女子に負けるという内容だった。

奈々はただコートに居るだけのお荷物であり、健介と祐樹は彼女を無言で睨んでいた。

「お前ら、終ったんだから、怒るなよ。勝負は時の運、バスケットは背の運だって……」

徹は泣き出しそうに俯く奈々の前に立ち、二人の視線を遮る。

「だけだよ……、そいつ全然やる気ねーじゃん」

「そうだよ。つか、お前もなんで敵にパスしてんだよ」

「あぶねーじゃん。もし眼鏡に当たったらしゃれにならないっての」

徹も内心悔しい気持ちで一杯だが、奈々を責めるつもりはなかった。

正直なところ徹は自分と健介と祐樹の三人だけでプレーしているつもりであり、むしろ彼女をバスターゲットにした祐樹にこそ苛立ちというか、意外性を感じていた。

「それに、やる気無いつてんなら昭だって同じだろ？ なぁ昭」

「うん。おなか一杯」

やや肥満な昭は給食の余りのマーガリンを舐めながら笑顔で返す。

「だからお前はデブなんだよ」

「てめえ死ね」

のんきな昭に毒気を抜かれたのか、健介も祐樹もがつくり肩を落とす、水場へと歩いていった。

「昭もゲームに参加しろよ。つか、マーガリンだけ食べて気持ち悪くないのか？」

「へいきへいき、カロリー三十パーセントオフだからヘルシー」

「はいはい……」

三十パーセントオフを二つ食べれば本来の百四十パーセントなわけだが、指摘するのも無駄と天井を仰ぐ。

コートでは上の学生が試合を開始しており、身長差もそう無いせい、良い試合に見えた。

実力差を無視して適当に組む偏った面子での試合に不満があり、そのことは何度か顧問に意見を出した。だが、常勝の女子達に邪魔をされ、それほどやる気のあるわけでもない顧問も面倒ごとは御免と取り合わなかった。

そのおかげでバスケットボールが嫌いになっていた。

「ごめんなさい……」

ボールの弾む音に紛れて、蚊の泣くような声がした。

「え？ あ、なんだ、相原か……。気にするなよ。別にお前のせいで負けたわけじゃないし、それこそ俺が五人居たって勝てないんだからさ。」

徹は運動が得意なほうで、それはクラスメートなら誰でも知っている。これがサッカーやソフトボールならまだしも、単純に背丈が物を言うバスケットボールではそれも発揮できそうになく、せいぜい裏をかいてのシーソーゲームが関の山だろう。

「だって、負けちゃって……。」

「だから、負けるのはしょうがねーよ。なんだよ、まさか健介とか祐樹のこと気にしてんの？ 負けてすぐだからそうなだけで、別にそこまで気にしてないって……。」

とはいえ、今の五人でのチームになって半年以上が過ぎて、勝率は三割を切る。その原因は昭と奈々にあるのも事実。背丈でいい訳の出来ないチームに負けた時は、さすがの徹も昭と奈々にあたりたくなる。

「昭を見ろって、全然気にしてないだろ？」

その昭は食べ終えたマーガリンをこっそり窓から捨てているところ。彼ぐらいの凶太さがあれば彼女も生きやすいだろう。

「だって、高杉君、運動神経いいのに、私のせいでいつも負けちゃって……。」

「バスケットからだって。別のだったら負けないんだからいんだよ……。」

だんだん涙声になる奈々をウザく思いつつ、このまま大泣きされたら面倒だと出来るだけ明るく話す徹だが、それも無駄に終わり……、

「ごめんなさい……。」

とうとう泣き出した奈々はしやがみこむ、眼鏡を外してえぐえぐと顔をハンカチで拭う。

「泣くなよ。別に誰もお前が悪いなんていわねーからさ……。たかがゲームだし。」

まるで自分が泣かせてしまったような徹は、必死に彼女を慰めようと声を掛ける。

今が試合の最中のおかげでそれほど人目につかないが、あと十分もして泣き止まなかつたら顧問も気付くだろう。そうしたら説明が面倒だ。特に女子に見つかるのはまずい。

徹は奈々の手を取ると、水飲み場へと連れ出す。

「あー、高杉が女の子泣かせてる！」

「げっ！」

しかし、残念なことに相手女子チームも水飲み場に居たようだ。その一人に見つかってしまい、気付いた面々がぞろぞろとやってくる。

「さいってー！ 負けたからってチームメイト泣かせるとかマジさいてー！」

「ほら、相原さん、行こう。こんな奴のところにいるとまた苛められるよ。」

女子達は泣いている奈々を庇うように立ちはだかると、口々に徹に文句を言う。

「いや、だから違うって、俺は別に相原を苛めたつもりはないっての……。」

「じゃあなんで泣いてるのよ！ アンタが苛めない限りありえないでしょ！」

「そうじゃなくて！」

「徹……。がっかりだよ……」

聞こえるようにため息を着く今野真奈は、徹の肩を叩きながらそう呟く。

「いつからそんな情けない男になったかと思うと、お姉さんは悲しいよ……」

真奈は徹の幼稚園からの幼馴染。今も一緒に遊ぶことが多く、気兼ね無く話せる友人の一人。

「誰がお姉さんだ！　つか、俺の言い分も聞いてくれよ」

昔は彼の後ろに居ることが多く、誰と遊ぶにしても顔色を伺うことの多かった真奈。それはおそらく背が小さかったことと、それを原因に苛められたこと。

それがいつの頃からか、彼女はぐんぐんと背が高くなり、徐々にはっきりとモノを言うようになった。

それからは行動的になり、友人も比例して多くなってきた。

最近では「今度はあたしが徹を守ってあげる」と言い出すようになり、徹も苦笑いをしていた。

「だってさ、相原さん泣いてたよ？」

「いや、だからね……。俺のせいじゃなくて……」

説明するとなれば健介や祐樹、さらには相手チームの面々を非難することにもつながり、かえって奈々の立場を悪くさせるような気がしてならなかった。

だからと言って青鬼のように悪者になって解決するはずもなく、眉間に皺を寄せるしかない。

「まったく、この馬鹿……」

真奈は徹のおでこをちよんと叩いて、チームメイトたちのところへと戻った。

昔は真奈のほろがずっと幼かったのに、いつからかお姉さん面をするようになった。それは頼もしくも寂しいことだった……。



\*\*\*

帰り道、健介と祐樹、それに昭と一緒にお店に寄った徹。

そこに例の女子達がやってきており、またも馬鹿にされていた。

—— 男子弱〜！

—— 男のクセに……。

—— 坊やだからね〜。

二十八対〇の結果をネタに散々イビラれる男子達は、歯軋りをしながらスルメの足を噛みしめる。

だが……、

「でも、相原さんもカンジ悪いよね……」

それが奈々の話になったところからだんだんと男子達とも意気投合し始める。

やる気が無い……、せっかく慰めてあげたのに……、見た目が暗い……、眼鏡がダサイ

……など話がぶれていった。

「正直さ、徹が相原泣かせたの見てざま〜って思ったけどね……」

美代子がそう切り出したとき、徹はパレードの代金七十円をカウンターに叩きつけた。

「徹、どうしたの？」

「手が滑って……」

「そ……。でき、あいつ……」

だんだんとヒートアップしだす奈々への悪口に嫌気が差したのか、徹は一人お店を出る。

彼はビンジュースを飲みながら帰路に着いた。

健介や祐樹が不思議そうにそれを見送っていたが、負けが込んでいい加減愚痴りたかった彼らは、女子達との会話に夢中になっていた。

\*\*\*

徹は陰口が嫌いというわけではない。潔癖な性格でもないし、参加することもある。

嫌いな教師のことを真奈に話すこともあったし、そういう陰湿な面が自分にあることを知っている。

赦せなかったのは、奈々が何に対して怒っていたのか、それを正しく理解していないことへの怒り。きっと彼女が怒ったのは、女子達のプレー態度だろう。

「ちよっと徹！ 待ってよ……」

「あ？ ああ、なんだよ、真奈……」

後ろからパタパタと走ってくる真奈を待ちながら、徹はジュースを少し飲む。

一体どんな着色料が使われているのか、やけに赤い炭酸水を飲みながら、げふと一息つ

く。雑な甘味料の喉の痛みを伴う甘み感じつつ、フタの裏の十円当たり少し喜ぶ。

「ねえ、なんでさっきから不機嫌なの？」

「そんなつもりはねーよ」

「あ、わかった。負けたからでしょ？ それも二十八対〇で」

にこりと笑いながら徹の気分をうかがう真奈。彼女自身、それが原因でないことには気が付いており、すぐに素面の顔に戻る。

「話してよ。じゃないとわからない」

「わからなくていいよ。俺もよくわかんないんだし……」

「相原さんのことでしょ？ なんで怒ってるの？ 皆が言うから？」

「ん、そんなとこかな？ でも、そうじゃなくて、ほら……」

「何？」

「いや、だから……」

普段なら真奈に素直に話せるけれど、今回の奈々についてのことを話すとすると、やや気が引けるところがあった。その一番の理由は……。

「彼女、苛められてるから？」

「ん……」

奈々が苛められているのは、クラブで一緒に居るところから気付いていた。ぱっとみて暗い雰囲気の彼女。背も小さく、運動神経も悪い。声も小さくていつも下ばかり見ている。

作文コンクールで入賞したりと学業面では良いものの、それがさらに煙たがられる一因になっているのだろう。

そこまでは彼女の不運に過ぎず、徹としてもそれを庇うつもりは無い。ただ、彼女の怒りの矛先を理解もせずに文句をつける女子達に腹が立った。

そして、それを真奈にも言えないのは、かつて真奈が苛められていたときと状況の一部が似ているから……。

「あ、もしかしてあたしに遠慮してるとか？」

「……」

彼女も彼との付き合いが長いせい、はたまた奈々の雰囲気は昔の自分に似ているせいか、それを察していた。

「おかしいと思ったんだ。徹が女の子苛めるなんてさ……」

「ん……」

「徹ってさ、優しいからね」

「そういうつもりはないよ。つか、庇ってないし……」

「庇ってたよ。ほら、常盤のパス。あれ、相原さんには絶対に取れないし」

「アイツバカだから……」

味方へのパスカットという珍プレー。けれど、それをせずには居られないのは、彼女の運動神経を知っているからこそ。

「やっぱり苛められてるのかな？ 相原さん……」

「だって同じクラスの子のクセに相原さんだもん。酷いんじゃないかな……」

「ん〜」

「でもどうにかしようなんて無理だよ？ 徹は違うクラスなんだし、いつも庇えるわけじゃないんだからさ……」

かつて徹にイジメを庇ってもらい、成長に伴ってそれを 「させなくてよかった」 真

奈は真理のように言う。結局は本人の問題なのだろうと結論づけているかにもみえ、徹は言いにくかった。

「別にそんなつもりじゃないよ。ただ、やっぱりなんかな〜って思ってた……」

徹は喉にひっかかるものを飲み込もうと、ビンジュースを口にしようとする。

「もーらい！」

しかし、それは真奈に横から奪われる。

「おい、返せよ！」

「やーだよ！」

必死に手を伸ばす徹だが、身長差で勝る真奈は手を目一杯伸ばして触れさせない。

「おい！」

彼女を掴もうとして手を伸ばすが、身体がそっと触れたとき、徹は辞めた。

「あれ？ いいの？ じゃあもうね」

真奈はそれ以上抵抗しない徹を不思議に思いながら、ごくごく飲み始める。

「うん、ありがと」

「汚ねえな。いらねーよ」

まだ残るビンジュースを返す真奈だが、徹はそれに目もくれない。

「汚いなんて失礼ね。ほら、返すから……」

「たつく……」

喚く真奈に面倒臭がりながら徹はそれを受け取り、しばし飲み口を見つめたあと、それをぐいと煽る。

「……間接キスだね」

その隣では頬に手をあてながらそっと呟く真奈が居り、徹は激しく噴出してしまふ。

「ぶげほ！ げほげほ……な、おま、ふざけん……げほ……な！ たたく、気管にはい

つたる……げほげほ……」

「あーあ、やだやだ。汚いわね〜」

「たたく、いつかしめる……」

「はいはい……」

しばらく咽たあと、徹は不自然なほどに急ぎ足になり、何度か真奈に 「待ってよ」 とせがまれていた。

急ぐわりには遠回りのはずの彼女の家まで向かう律儀な徹。また明日と手を振る真奈を



見ずに、彼は自分の身体の中にある不思議ないきり立ちを感じながら、一度も休むことなく走って帰った……。

\*\*\*

一週挟んで再びクラブ活動がやってくる。今日は先生が先輩達の修学旅行の引率に行っているため、視聴覚室でバレー部と合同で映画を見ることとなった。

生徒の中には勝手に体育館を使っていたり、帰ったりとまばらであった。

健介と祐樹は映画を見るのに夢中であり、もともと運動が嫌いな昭も視聴覚室に残っていた。

徹としては体育館でバスケットボールをしたかったのだが、三人ともこの調子なのでそれもできない。

それなら映画を見るべきかと思うも、前に真奈に誘われて見に行ったことのある内容。当の真奈はチームメイトの女子達と一緒にすでに体育館に行ってしまった。

廊下に出たり入ったりしながらどうしようかと考える徹。真奈に頼めばゲームに混ぜてもらえるだろうし、気持ちとしては体育館に向いていた。

「練習、しませんか……」

すると意外なことに奈々が声を掛けてきた。

「え？ 何？」

「練習、バスケの……」

最初何のことかわからなかった徹はきよとんとしながら彼女を見ていたが、まだ体操着でいることに気付く。

隔週でしかも十数分程度の合間の練習では付け焼刃程度も意味を成さないだろう。そもそも彼女自身、非常に運動が苦手であり、合同のプールの授業では、端っこでビート版を手にバタ足の練習をさせられていた。

「お、おう。わかった」

けれど、彼女の真面目な顔付きに気圧されたというべきか、徹は映画に夢中な二人に丸めたティッシュを投げつけたあと、体育館へ向かった。

\*\*\*

「じゃあまずはパスからかな。軽く投げるから、最初は手のひらで押える程度でいい。慣れることから始めよう」

体育館の隅っこでボールをワンバウンドで投げる徹。

「うん、がんばる！」

奈々はへっぴり腰で怖がっているのがみえみえ。突っ張った手の平にボールが当たるも、目はぎゅっと瞑られていた。

「だめすぎだろ」

転がるボールを追いかけける奈々は難しい表情で彼にボールを返す。

両手で掴んだそれを放るも、それは弱々しい放物線を描き、彼の前で三回バウンドして届かない。

「ん、相原、ボールの持ち方と投げ方なんだけど……」

「はい」

奈々にボールの持ち方と投げ方を教える徹。奈々は真剣な表情でそれを聞き、何度か素振りをする。

指導する際に触れた彼女の腕。白くて細く、華奢という言葉がよく似合う腕。ひんやりとして、じわっと汗ばむそれを手にしたとき、彼にふと眩暈のようなものがあつた。

「どうかしましたか？ 高杉君」

瞬きを繰り返したのを見られたらしく、奈々は心配そうに彼を見る。

「いや、なんでもない」

彼女の出来がすこぶる悪いせいだろうかと思いつつ、ぶるぶると頭を振る徹。もう一度距離を取って、彼女に投げてもらおうことにする。

「えい！」

同年代女子と比べても緩い放物線だが、今度はワンバウンドで彼の元へと届く。

「うん。ずっと良くなった」

そしてツーバウンドで投げ返す徹。しかし、まだキャッチする方法は覚えておらず、あわあわと両手を出してのへっぴり腰。まだまだ道は険しいと思つた瞬間であつた。

\*\*\*

練習を続けること十数分。放ることとキャッチする程度まではなんとか出来るようになり、次のステップとしてドリブルの練習を始めます。

鞠つきのようなのんびりしたそれでは、ドリブルに達するには難しく、容易にカットされるだろう。

そこは徹も理解しており、再来週の試合でいきなり彼女にそれを求めるつもりはない。今している練習も彼にしてみれば暇つぶしであり、彼女の満足に繋がればという程度。

「高杉君、パス！」

ボールをつきながら歩く程度に成長した彼女は徹にパスをする。両手でポンと投げ出されるそれは、まだ勢いが足りないものの、最初と比べれば十分な成長だ。

「ナイスパス！」

それをキャッチする徹は大きさに床に転がり、親指をぐっと立てる。

「もう、高杉君たら！」

楽しそうに笑う奈々に、徹も笑い返すが、その心中には不思議と熱い何かがあつた。

「あ、また高杉が相原さん苛めてる！」

すると、試合を終えたのか例の女子達が汗をたらしながらやってくる。

「ちげーよ、練習に付き合ってただけだったの」

「へへ、女の子と二人だけで秘密の特訓ですか、おあついですね」

にやにやしながら囁し立てる綾子とその友人達。内容がわからない程度にひそひそと話し、さらには指をさしたり煽ってくる。

「どうせ練習したって無駄だってば。運動オンチなんだしさ」

その言葉の矛先はきつと彼の後ろの女の子をさしているのだろう。むしろ彼女こそ奈々を苛めているわけだ。つまり確信的な行為。

「いい加減にしろよ。こっちは練習してるんだから。邪魔するなら他所いけ」

「別にどこにいたって勝手でしょ？ いやならそっちがどっかいけっての」

「あ、もしかしてかけ落ちとか？ うわーやらしい！」

「へへ、相原さんて高杉君が好みなんだ。意外〜っていうか、チビ同士お似合いかも」

露骨になる言葉に徹は女子を睨む。

「ちょっと、やめようよ。ほら、ね、ね……」

立場ときに難しい真奈は間に立って仲裁をしようと宥める。

「……ん……、行こうよ。相原さん」

真奈が徹を見てウインクするのを見て、徹は仕方なしに奈々に振り返る。彼女は顔を真っ赤にしており、今にも泣き出しそうにしていた。

「うん。高杉君……」

二人はそのまま体育館を出るが、その後ろからは……、

「やっぱり二人、付き合ってるとか？」

「やらしいね。ね？」

楽しそうにからかう声が聞こえる程度の大きさで追ってきていた……。

十

グラウンドではサッカークラブが試合をしていた。

畑仲裕也はドリブルを続け、グラウンド中央まで上がっていく。クラブ活動程度のサッカーのせいか、そこまで熱心にカットしにくる子もない。

ゴールポストが見えたところで周りを見て、パスターゲットを探す。審判はサッカーに詳しくない先生なのでオフサイドを取らない。ゴール近くに居た飯倉徳夫にパスを出す。

徳夫は町の野球クラブに所属しており運動は得意。だが、サッカーはそれほど興味が無いらしく、普段はゴールポスト近くでパスを待っているふりをしてさぼっている。それでも一応ボールが来ればそれらしい動きをする。

向かって来るボールを胸で受け、それをそのままゴールに押し込む。その繰り返しなのだが、その日は少し違った。

サッカークラブに所属する吉川雄二がそれを横からかすめ取る。

「!？」

彼も普段はやる気を見せないのだが、なぜか今日に限ってでしゃばっていた。雄二はボールを蹴上げると、グラウンド中央に強引に戻す。

「くそ」

さすがに目の前でボールを取られては立つ瀬が無いと、徳夫も追いかける。ボールは既に中央に戻っており、石川琢磨がボールを保持していた。

「……」

拓馬は雄二と同じサッカークラブに所属しており、ボールの扱いはかなりの腕前だ。軽く受けると、それをもう一度戻そうとする。しかし、その前に雄二が勢いよくかけて来るのが見えた。

「……」

拓馬はドリブルに切り替え、正面から受ける。

「……!」

雄二がボールの動きを読み、さっと奪う。すぐに翻し、ドリブルで上がっていった。

「おい、サッカー部！ なにやってんだよ」

遅れてやってきた徳夫が言うが、拓馬は特に焦った様子も無い。

「ああ、すまんすまん。ぶつかったら怪我するし、ちよつとな」

そう言って走り出す拓馬だが、ボールを取り返すつもりも余裕も無いらしく、じゃんけんで負けたゴールキーパーがあたふたしながらシュートを見送っていた。

笛が鳴り、中央に戻る雄二。周りにゴールをアピールしながら走る彼はまるでサッカー選手を真似ているのだろうか。

「かっこいいー！」

「吉川くーん」

見物していた陸上クラブ女子の井上美優と荻原翼が黄色い声援を送ると、雄二も調子に乗って手を振り返す。

「キザなやーっ!!」

徳夫は歯を食いしばり、そう叫ぶ。

「どうにかなんねーのかよ！」

「どうにかっつってもなあ……」

嫉妬混じりで怒りだす徳夫は友人である拓馬の首根っこに腕を回してぶんぶん振るう。

「次こそ勝つぞ！」

「なんでそんな一生懸命なんだよ。野球部のくせに」

「いいんだよ。とにかく女に叫ばれて！ くっそー!!」

少し前までは特にそんな様子も無かった徳夫だが、最近は何かと女子を意識しているようだった。

徳夫、拓馬、そこに荻原翼を加えた三人が幼馴染の仲良しグループ。昔から一緒に、遠足や校外学習をする時などよく三人で一緒にグループを作っていた。

男二人と女一人。最近はそのを意識することも増えたのか、徳夫はよく翼と話したがるようになった気がする。今も翼が雄二を応援しているのが気に入らないのだろう。

「ほら、気合見せろ、気合」

「ねーよ、そんなもん」

拓馬は知ったことではないと首を振る。

「拓馬ー、だらしなげー！」

そんなところに都合悪く翼の声援が届く。こうなると俄然徳夫がやる気を出してしまう。

「おら、いくぞー！！」

「へいへい」

仕方なくボールを追いかけることにした……。

\*\*\*

奈々を連れ立った徹は、どう声を掛ければ良いか悩んでいた。

体育館では涙しなかったけれど、どうせ堪えられなくて泣くだろう。その時、誰かの目に着かないようにと遠回りしているわけだが、意外にも彼女は鼻をすする程度で留まっていた。

「がんばるなあ、相原……」

「え？ 何がです？」

「いや、泣かないから……」

教室へたどり着いたところで彼女に振り返る徹。その目はまだウサギのような真っ赤な目だけれど、零れた跡も拭いた跡もない。

「平気です。これぐらい」

そういつて笑う彼女に、徹は悔りすぎたかとも思い始める。

「そうか？ ふうん。そっか……」

そして、にこっと笑うお下げの眼鏡の彼女が、少し可愛いと思った。

「高杉君はどうします？ 視聴覚室に戻りますか？」

「いや、面倒臭いから帰る。つか、あの映画見たことあるし」

「高杉君、映画好きなんですか？」

「いや、嫌いだよ。でも、真奈が見たいっていうからさ。なんか一緒に連れてかれた」

「真奈って、今野さん」

「ああ。昔から一緒だからな」

「ふうん。そうなんですか……」

真奈との関係は徹の友達のほとんどが知っている。というより、大半のクラスメートは

同じ幼稚園であり、徹と似たり寄ったりの繋がりを持っている。ただ、彼が彼女にとつて他の子より近いのは、彼が幼いころ彼女のことを年長組みの子から庇ってあげたから。その時言われた「徹君のお嫁さんになる」発言は、忘れた頃に冷やかされる困った思い出だ。

「じゃな」

あまり詮索されたくない徹は無理やり話を遮ろうと、そそくさと自分の教室を目指す。

「あ……うん」

奈々もまだ何か言いたげだったようで、彼の目論見は上手くいったかに見えた。

「おい、徹！」

しかし、それをぶち壊すのが真奈の声。ぱたぱたと駆けてくる彼女は二人を見ながらはあはあと息を整える。

「なんだよ真奈……。俺はもう帰るんだけど……」

「うん。あなたには用ないの。それより、相原さん。ごめん！」  
がばっと頭を下げる真奈に二人とも面食らう。

「え？」

「おい？」

「さっき、相原さんがいろいろ言われてたとき、注意できなくて」

「え、別にしようがないよ。それに今野さんのせいじゃないし……」

「でもゴメン。それを言いたくて」

ようやく顔を上げる真奈は奈々を見下ろす格好になる。

彼女が悪口に参加していないことは知っているし、奈々はもういいからと真奈の顔を上げさせる。

「まあな。次から気をつけろよ」

代わりに徹が口元をにやりとさせながら、幼馴染をちくりと刺す。

「あんたはだまってなさい！」

軽口を叩く徹を小突く真奈。奈々の顔にも笑顔が浮かんでいた。

\*\*\*

教室に戻った徹と真奈は着替え始める。更衣室のようなものではなく、女子も男子も一緒に着替えるわけだが、何人かは異性を気にし始める頃でもある。

それは身体の成長に比例しているわけではなく、意識レベルの差というべきで、男子とそれほど代わらぬ体躯の女子も恥ずかしがるように真っ赤になったり、逆に男子も特定の女子をちらちら見ていたりする。

その対象の一人が、真奈であった。

去年から身長がぐんぐんと伸び始め、それにつれて胸元が成長し、今では服の上からふ

くらみが見えるほど。

それが目立たないようにするためか、最近は一つ上のサイズの服を野暮ったく着ていることが多い。

夏休みの頃に映画に行ったときは、引率してくれた彼女の姉がファッション雑誌を参考にしたせいでデニムの短パンとノースリーブのシャツを着ており、もぎりの女性に高校生と間違われたほどだった。

そういった性徴の遅い徹にしてみれば、いくら夏でも「露出しすぎで変な女」という感想しか持たず、真奈も「だよな」と恥ずかしそうだった。

この前の試合で彼女を重点的にマークしていた祐樹の話だと、ブラをしていないそうだが、それを初めて聞いたとき、「だからどうした」としか思っていなかったが、よく考えれば、祐樹はそれを判別したわけだ。

つまり、祐樹が真奈の身体、それもおっぱいに触れたのだ。

徹自身、まだ異性に対する意識というものが鈍いのか、胸の成長は運動がしづらくなるだけと捉えており、それほど注視することもなかった。

けれど、幼馴染のおっぱいの大きさと柔らかさを鼻の下を伸ばしながら語り、聞き耳を立てるクラスメート達に、嫉妬に似た苛立ちを覚えるのも事実。

そして、体育の前にのんびり談笑しながら着替える彼女に集まる視線にも、やはり苛立っていた。

「よいしょと……んふう……んっ！」

背を向けながら着替えていた徹の耳に彼女の声が聞こえた。

鼻にかかった甘ったるい声で、こういうのも男子達の格好の下ネタになる。

「俺、先に出るから……」

なんとなく聞いてはいけけない、同じ場所に二人きりでいてはいけけないような気がした徹は彼女を見ないようにそそくさと教室を出ようとする。

「あ、待って！ あのさ、なんかひっかかっちゃって取れないの。ね、とつて？」

振り返るとサイズの大きめのパーカーの首の辺りと腕にある紐がひっぱりあっており、首を出そうにもつかえていた。

「ししようがねえな……」

しづしづかけより、紐を外そうとする徹。ふと視線が彼女の無防備な下着へと移る。

話に聞いていた通り、彼女はまだブラをしていない。

シャツの下のおっぱいとおっぱいは輪郭を見せ、乳首がツンとシャツを尖がらせていた。

ゴクリ……。

唾を飲む徹。色素の濃い乳首と乳輪がうっすらと見え、その丸みとふくらんだ感じをまざまざと見せる。

——真奈のおっぱいすげーやわらけえの。本当はもみたかったけど、背中で感じる分

でも十分にわかるよ。まじで気持ちいいから。

祐樹の言葉が頭を過ぎる。手を伸ばして、紐を解くふりをした事故にみせかけて揉んでみたい。

悪戯。笑って済ませられる程度のこと。けれど、それをしたら、きっと……。

「おい、取れたぞ……」

「ん、んう、ふう！ ああ、良かった……」

ほっと顔を出す真奈はありがとと言いながら体操着をしまう。

「それじゃ帰ろうか？」

徹は後悔に似た気持ちを抱えながら、教室を出た……。

翼の声援欲しさに必死になる徳夫だが、サッカークラブでエースである雄二に追いすがることができず、ハットトリックを決められてしまった。

「ちきしょー」

悔しそうにタオルを振り回す徳夫だが、他のメンバーは冷ややか。審判がまともなジャッジの出来ないゲームにやる気が起きるはずもなく、皆適当なところで手を抜いていた。

「どう、俺のシュートみた？ すごいっしょ」

「さすが雄二君、かっこよかった」

美優がきょつきやと囃し立てているのが癪に障る。隣では翼も付き合っって黄色い声を出してなおのことだ。

「今度の試合も見に来てよ。俺、絶対勝つから」

スポーツマンで勉強もでき、村でも有力な土建会社の社長の息子。顔もイケメンであり、女の子から人気もある。同級生からすれば非常に妬ましい存在だ。

「くうく、あの野郎……」

単純な徳夫は嫉妬の炎前回でその光景を見ていた。

「んもう、だらしがないね。二人とも」

二人を労いに来た翼は腰に手を当てふふんと笑う。

「うっせーな。これが野球だったら俺が勝ってたっつての」

「そう？ でも、吉川君ってスポーツ得意だし、野球でも負けちゃうんじゃない？」

「んなことねーよ。なあ、拓馬」

「ん？ ああ、そうだな。次は頑張るよ」

話を聞いていなかった拓馬は適当に合わせたつもりで言葉を間違える。

「だいたいお前もサッカークラブだろ。しっかりやってくれよ」

「最近始めたばっかだし、まだ野球の方が得意なんだよ」

「この裏切り者」

拓馬は最近になり少年野球をやめ、サッカークラブに入った。彼曰く、坊主が嫌だかららしい。

「雄二だけじゃなくゲンチも居る。メンバーから見直さないと勝てないっつて」

ゲンチこと源栄一はサッカークラブの古株。前はフォワードで今はミッドフィルダー。

雄二がフォワードとなり得点を稼ぐせいか、彼の出番はほとんど無く、今日も自陣でストレッチをしていた。

大して疲れていない栄一はクラブが終わるとすぐに後片付けを手伝い、今は水飲み場で水を飲んでた。

「ゲンチなんて雑魚だろ。あいついつつもストレッチしかしてねーじゃん」

「ん〜…そうなんだけどなあ」

拓馬は彼と一緒に練習をするようになってわかったが、栄一はかなり上手だった。

ボールさばきがよく、対面するとかかなりの高確率でボールを奪われる。ただ、ボールをすぐにあげていくので、得点に絡む場面を見ない。ミッドフィルダーとしては正しいのだが、■■のサッカーらしからぬ老獪な態度が不気味だった。

今も一人でさっさと片付け、水飲み、着替えとそっけない。どことなく、話しにくい子だった。

「ん？ あ、御崎さんじゃん」

水飲み場で顔を洗っている栄一の傍に髪の毛の長い、色白の子がやってきた。彼女は御崎澄子。学年一の美少女、深窓の令嬢と囁かれている。

大人びた風貌、愁いを秘めた控えめな睫毛、整った鼻立ち、少しふくらみかけの胸元と、丸みのあるオシリ。特に色白で、普段から日焼けしないようにと日傘をしていることが多い。言葉遣いも丁寧で、物腰穏やかで頭も良い。

体育の時間、水着になると男子がきよろきよろと彼女を探す。よく見学しているためか、わざと見学する男子もいたりする。

話しかけにくいせいも、彼女の周りに人は少ないが、唯一の例外が栄一だ。彼は彼女の幼馴染であり、よく一緒に居る。

「なんだよ、栄一の奴、また御崎さんにちよっかいだして」

「ちよっかいって…」

見た感じ、澄子の方が栄一の方へ向かったわけだが、徳夫の妬みフィルターを通すと常に男子が悪いようだった。

「御崎さんて話づらいからねえ」

「そうだな」

翼の言葉に徳夫は頷く。彼も学年一の美少女に興味があるのだが、おいそれと話しかけることができないでいた。

「あーあ、俺もあんな美人の幼馴染が良かったぜ」

「はー！ なんですって！？ 徳夫みたいな奴、あたしじゃなかったら女友達なんてできなから！ 絶交するわよ」

さすがにカチンと来た翼はカンカンになって言い返す。

「いや、ごめんごめん。ほら、そんだけ御崎さんがさ」

「あたしだって源君みたいなクールな幼馴染がよかったわ〜」

「そんなこというなよ。ったくよー」

「やれやれ…」

拓馬は無い物ねだりな二人を見て肩をすくめて居た。

卓球クラブに所属している錦織満は大して運いたわけでもなく息切れしていた。

「ふうふう……あーつかれた……」

デブでデビで汗っかきの彼は運動が苦手。あまり動かなくていいだろうと思つて卓球を選んだが、室内で小刻みな運動を続ければ、それなりに汗をかく。へたれこみ、皆の片づけを眺めていた。

「大丈夫？ 満君」

同じクラスの若竹則武が声を掛けると、彼は首を振る。

「疲れた。歩きたくない」

ラケットを扇子代わりに仰ぐ。もうそれほど疲れているわけでもないが、せつかくだからと武則の後片付けをさせていた。

「ほら、教室戻ろう」

武則が手を貸すが、彼は首を振る。

「俺いいや、先帰つてろ」

「え？ いいの？ わかった」

武則は頷くと道具片手に教室へと戻つていった。

満は他の生徒も帰っていくのを見て、ようやく立ち上がる。そして教室とは別の方へと歩いて行った……。

三組の教室は囲碁将棋が行われるため、クラブ活動の時だけ別の教室を使う必要があった。その空き教室の廊下に男子の服が鞆の上に置かれている。というのも、中を女子が占領しているからだ。

男子のほとんどは文句を言っていたが、徒党を組んだ女子に「スケベ、エッチ」と言われると抵抗できず、仕方なく外で着替える。

最近では他のクラスの女子も使うことがあり、女子更衣室と化していた。

その代り、部屋の片づけをしなくて済むので、それほど文句も無かった。

ほとんどの男子は着替えると同時にすぐ帰つてしまい、誰も残つて居なかった。だが、空き教室では女子の話声が聞こえていた。

満は一人、廊下で着替えると、すぐに荷物を抱えて隣の理科準備室に入る。

そして壁に近づき、周期表をずらす。

すると壁に穴があり、そこから隣の部屋を覗けるようになっていた。

空き教室はカーテンが閉められている。蛍光灯に照らされながら、開放感故におおびるげに着替える女子達。

「……ふう、今日もつかれた〜」

井上美優が背伸びをしながら言う。

セミロングの髪はそれほど丁寧に入入れがされておらず、すこし雑。顔立ちもそれほど目立つわけでもない地味な印象で、胸もオシリも小さいまま。

まだブラジャーが必要ではないが、他の子がつけているので見栄をつけているが、やはりぶかぶか。そのおかげで小さく赤い乳首が見えた。

美人というほどでもない彼女だが、同級生のおっぱい、乳首が見えると気持ち昂る。

少し膨らんだ程度のおっぱいは見えたえ無けれど、股間に集まるモノがある。

「……すごいよね、吉川君。ハットトリックだっけ？」

隣では翼が着替えはじめていた。

彼女は幼馴染に合わせて運動をするためか日焼けが目立つ。やや浅黒い肌と、下着の痕が色白に残る。

スポーツブラが必要な程度におっぱいがおおきくなっているため、肝心なところは見えない。ただ、健康的なむちっとした太ももと、グレーのパンティ食い込むオシリを見るとどきどきさせられる。

そこそこ大きく柔らかそうなオシりは、一度鷲掴みにしてみた。

もしかしたらもう幼馴染のどちらかに堪能されているのかもしれないと思うと、妬ましくもある。

「……………」

その奥、無言で着替える子が居る。

長い髪と物憂げな睫毛、ほっそりとした顔立ち、すらっとした肢体。ピンク色のブラジャーはBカップらしい。夏の半そでの体操着だと模様が浮かぶこともある。後ろ姿では背中だけしか見えないけれど、何かの拍子に振り返り、正面が見えた。

薄ピンクのパンティで隠された股間の三角地帯はもう生えているのだろうか。

おしとやかでどこか他の女子と一線を画す彼女も陰毛がはえているはず。

ぼーぼーだろうか、それとも薄いのか？　そこがどんな風になっているのか、妄想しては、やりどころのないチンポにもやもやする。

「……御崎さん、どうかした？」

「……いえ、ちよっとタオルが無くて……」

彼女はタオルを探しているらしい。どこにいったのかと教室を探し始め、そのうちののぞき穴の近くまで来た。

「……………!!!」

覗き穴のすぐ上を見る澄子。前かがみになったせいで胸の谷間が真ん前にきた。

重力に従って下に引っ張られるおっぱい。ブラジャーが少しずれ、ふっくらした丘のてっぺんが見えそうになる。

小さくぼちっとした、色のちよっと濃いモノ。

——御崎さんのおっぱい！！

澄ました顔の澄子。自分が話しかけてもそっけなく袖にされるのがオチ。そのくせ雄二が話しかけると笑顔で談笑する。やはり男は顔なのか、といらだつ日々。

そんな自分が今しがた見た。

澄子の小さくきつい色をした乳首。形の良いおっぱいだが、乳首の色は濃い。柔らかさうで、吸ったらどんな風になるのだろう。彼女も自分でいじるのだろうか。どんなに澄ました顔をしていても性欲ぐらいあるはずだ。きっと自分でいじって、その結果、あんな色になったんだ。

澄子はむっつりスケベ。隠れてエッチなことをしているのだ。

そう思い込む。

興奮の余り、声を上げそうになった。股間が熱い。なにかがじゅくつとする。パンツが濡れて気持ち悪い。

「……あつた、なんでこんなところに？」

タオルを見つけたらしく、澄子は戻っていった。

まだ眺めていたのに遠のく色白おっぱい。チンポもしゅんとし始めがくりと肩を落とす。すると、今度はまた別の女子がやって来る。

「……今野か……」

少し前まではチビでずんぐりした印象しかなかった。その頃は満もイジメに加担しており、すぐ泣く様を見てげらげら笑っていた。

それがいつの間にか背丈で逆転されていた。

昔のことを引き合いにしてからかおうにも自分に続く者が居らず、ついには「バカじゃない？」と言いつ返されて立場が完全に逆転した。

もともとチビでデブな満は他人から好かれておらず、当然の結果なのだが、当人だけは真奈に馬鹿にされたせいだと思つて譲らない。

「くそ、バカにしやがって……。たかが背が伸びたぐらいで……」

そう思いつつも真奈の身体付きを見て目を見張る。胸も大きく育ち、お尻も丸くてエロい。澄子を見失つてなえかけたチンポが再び元気になる。

「よし、そこで着替えろ、俺が見てやっからな。てめえの無駄にでかいおっぱい、俺に見せるよ。そうしたらイジメないでやるからよ……」

穴に張り付き、真奈の動きを見つめる満。壁の向こうでは何も知らずに着替える真奈が体操着に手をかける。そしてぐいっと捲りあげると、ブラジャーごと外れたらしく、大きなおっぱいがぼろんとこぼれる。

「！」

ソフトボールぐらいある柔量感漂うおっぱい。丸くて柔らかそうで、少し汗ばんでしつとりしている。もう少しで臭いが漂ってきそうな真奈のおっぱいを眺め、満はパンツを濡らしていた。



ブルンと揺れる真奈のおっぱいを目に焼き付けよう乾く痛みも耐えてじろりと見る。そのままパンティもブルマごと脱いでしまえと願いつつおさまり所のないチンポを持て余していた……。

\*\*\*

徹が隣の教室を覗くと、奈々が体操着の袋を見ながら立ち尽くしていた。すでに着替えも終えているだろうけれど、なぜかじっと立っており、腕を見ていた。

「あれ？ どうしたの？ 帰らないの？」

真奈の声に奈々は、はっとした様子で二人に向き直る。

遠慮なしにずかずかとやってくる徹たちに、奈々はぱっと腕を隠す。

「なんでもないです。今帰ろうと思って……」

「そう？ もしかして腕痛めたとか？ 相原さん、華奢だからね……」

笑いながら言う真奈を奈々はじっと見つめる。

「あ、ゴメン、気にしてた？」

「いえ、そうじゃなくて、あの……」

「なに？」

「今野さんって高杉君と仲がいいんですね」

まじまじと見つめる奈々に真奈は一瞬たじろぐ。

「え？ ああ、別にそんなでもないっていうか、ね？」

「なんで俺にふるんだよ。まあ、コイツとはクラスよく一緒になるからな……」

「他の子と比べて一緒に居ること多い？ くらい？」

ふと思いつくと、二年ごとにクラス替えがあるのだが、かなり一緒であった。それを縁

というには似たような関係に祐樹もおり、偶然としかいいようもない。

「おまえが俺のことときき使おうとするからだろ？」

「なによ。嬉しいくせに！」

「何が嬉しいだよ。俺はそんな趣味ありません」

仲も幼稚園の頃を知るものからすれば夫婦扱いされることもある程度。友達以上、親友

といえるのではないかと徹は考えていた。

「そうですか……ふうん……そう……」

奈々は二人を見ると不意に下を見つめ、腕を押えだす。

「あれ？ やっぱり痛いのか？ 腕」

「まじで？ やっぱり急に練習したからかな……」

「痛いかも……しれません……」

するとほろぼろと涙が零れ始め、さらに腕をきゅっと掴む。

「ああ、まずいな。一度保健室行こうよ。捻挫してるかもしれないし」

「うん。行こうか……」

「いえ、大丈夫です。一人で行けますから……」

「いいよ。すぐそこだし、ね？ ほら行こうか……」

真奈が彼女の手を引いて促そうとしたが、奈々はそれを払うかのように手を引く。

「相原さん？」

突然のことに真奈は彼女を見つめてしまうが、涙を零す奈々は被りを振る。

「ごめんなさい。ぴりって痛くなつて……」

「そう」

奈々の伏し目がちな視線に真奈は一瞬たじろぎつつ、手を離す。

「ほら、早く行こう。ぐずぐずしてたら先生帰っちゃうかもしれないからさ！」

そう言って手を引く徹に、今度は奈々も素直に従った。

真奈は暫く振り払われた手を見ながら、奈々の不自然な上目遣いに眉を顰めていた……。

\*\*\* 時は過ぎ、春を迎えた鬼瓦村 \*\*\*

ヒュンヒュンと飛び交うシャトル。初速ならトップクラスのバドミントンで、徹は汗を流していた。

春休み、成長の兆しの見えない徹は負けっぱなしのバスケットボールに見切りをつけ、自身の運動神経が活かせるバドミントン部へと移った。

祐樹や綾子に 「逃げた」 と囁かれたが、事実その通りと聞き流した。

真奈は 「一緒にバスケしたかった」 と残念そうに言ってくれたが、さらに成長を続ける彼女を見ていると惨めな気持ちが強くなる。

徹はそういう雑念を振り切るように、シャトルを追い、コートを駆けた。

もともと運動神経の良い彼は、クラブ内で上位の成績。

それを追うのが一年下の篠原智樹。彼は子供の頃から母親にバドミントンの相手をさせられていたらしく、クラブの他の子よりも上手だった。

徹も負けん気の強い後輩に追いつかれまいと、図書館でバドミントンに関する本を読んだりと研究に余念がなく、たまに鬼瓦蛇川公園で練習をしている彼に野試合を挑まれたりと充実したスポーツライフを送っていた。

その日、クラブを終えた徹は、図書館にルールブックを返しに行った。

読みふけているうちに返却期限を大幅に過ぎてしまい、図書室管理の先生からお小言を言われていた。

今日こそ忘れずに図書室へとやってきた徹は、受付で本を読んでいた係りの子に本を渡す。

「すみません。この本返却で……」

「あ、はい……」

図書委員の子は眼鏡にお下げといういまどき古風な雰囲気の子で、貸し出しカードをばらばらと捲り、返却スタンプを押していた。

「高杉君」

「ん？ えと……俺ってそんなに有名？」

突然名前を呼ばれたことにびっくりするが、貸し出しカードに書いてあるわけだから不思議というほどでもない。

前に返しに来たときは談笑半分にろくに仕事もしない委員がこちらも見ずに受け取るだけだったので、意外ともいえる反応であった。

「相原です。お久しぶりです」

ぺこりとお辞儀する彼女に去年バスケットで一緒だった運動オンチの女の子を思い出す。

「ああ、相原さんか。図書委員なんだ」

「はい……」

「ふうん、そうなんだ……」

特に親しい間柄というわけでもない徹からすれば、無意味に呼び止められても話すこともなし。立ち去ってよいはずなのに無言の時間を無為にすごさねばならず、なぜかわき腹が痛い。

「今、何部なんだっけ？」

「えと、家庭科部です。高杉君は……」

「俺はバドミントン部。つか、この本もそれ関係ね」

「あ、そうですね……」

無理に話題を振るも、またも空白の時間が訪れる。その無為な時間に余計な思考が巡り始める。

運動が苦手な彼女が家庭科部に入ったことは、素直に良かったのだろう。

自分が背丈を理由にバスケットボールに見限られるのと同じで自然なこと。後ろ向きな逃げではなく、理に適った選択をしているだけのこと。

「今度……」

「はい？」

「今度実習でお菓子を作ったら持ってきます。食べていただけませんか？」

「え、お菓子？ いいの？」

「はい」

「そ。悪いね。じゃあ、来週またここに来ればいい？」

「待ってます」

「うん。ありがと。それじゃ」

「はい……」

帰るきっかけには上出来な会話を交わし、徹は図書室を後にした。

「となるから、こうなる。つまり、この場合、登場人物は……」

「これって百合子？」

岩村勝行が授業をしていると、能天気な声が教室の隅で聞こえた。

「ああ、それ？ まあね」

当人は一応声を潜めたつもりらしいが、教壇に立つと十分に聞こえる声だった。

「へー、すごい。百合子タレントみたい」

柳瀬愛。明るく人懐っこいが、その時気になったことをすぐ行動に移してしまうせいとか、こうして授業中もおしゃべりが絶えない。

背が高く、そのせいかクラスでも強気な立場を取るが、愛嬌があり、いつもけらけら笑っている印象がある。

男女問わず仲良く話せるのは彼女の長所で、短所は無駄口ばかり叩くことと、おバカなところ。

胸やおシリはそこそこそだっており、何か悪さをした時はチャンスだ。

彼女を一人教室に残し、前に立って叱りつける。彼女はときおりぶかぶかなシャツをきてくるので、首の辺りから胸元が覗けるのだ。他にも寒くないのかと言いたくなるぐらいのミニスカートを穿いてくるので、何かを謝らせる時、背後に立ってパンティを見るのも楽しい。

「よしなって……」

佐々木百合子。背が高くスタイルが良く、少しきつめな顔だが美人な子。おっぱいは勝行の手でつかんでも余るぐらいに大きく育ち、おシリも運動をしているせいで肉付きが良く、これまた掴みたくなるむっちり具合。

最近ではブラジャーをしており、体育の時は白い体操着の下で青やピンク、時折グレー、場合によって黒が浮かんでいる。

ガキのくせにと思いつつ、最近はストレッチ名目で背中伸ばしをさせ、おっぱいの膨らみ具合を観察していた。

「こら、今は授業中だぞ」

教員の仕事と、勝行は二人の傍へ行き、本を取り上げる。

「あーん、先生、返してよく、もう見ないから、ごめん」

手を伸ばす彼女だが、その隙間からおっぱいの谷間がちよつと見える。

「いかんいかん、今は授業中だろうが。これはあとでな」

「ばーか」

百合子が愛を囓うので、彼女も指導名目で見下ろす。

「佐々木もだ。ちゃんと前向いて授業受けなさい」

見下ろす姿勢だとよく見える。今日はいにくブラウスだから谷間は見えなけれど、やっぱりおっぱいが大きい。

「……」

嫌悪感を込めた眼差しが返される。

「なんだ？　なんか文句あるのか？　言ってみなさい」

「なんでもありません」

もし、カメラがあったら録画していた。

この構図だと、まるで嫌々ながらにフェラチオをしているように見えた……。

「それじゃあこの問題は……」

志垣隆が計算問題を黒板に書き、生徒の方を振り返る。

ほとんどの生徒が下を向き、当てられないようにとじていた。

「……」

余計な時は無駄話に興じる彼らだが、都合が悪くなるとだんまり。

「宿題にするか。代わりにドリルの十五ページを開いて、そこを解いてくれ。終わった人から休み時間に入るように」

休み時間と聞いて皆ばらばらっとページを開き、かりかりと鉛筆を走らせる。

腕時計を見て残り時間を計算し、教室を見て回る。

皆ドリルに集中しており、自分のことは気にしていない。

去年までは大して面白味も無かったが、最近は密かな楽しみがある。

女子生徒の中でもスタイルの良い子を探し、そういう子を眺めることだ。

萩千夏は背が小さく、まだまだガキなのだが、ボーイッシュで運動が好きなせいとか、服装がラフ。今も大きなパーカーを着ており、前のめりにすると首のところから胸元が見える。

前に座っていた満がドリルに苦戦していることを良い事に、彼にヒントを出すふりをして彼女の胸元を覗く。

背丈のわりにおっぱいに栄養が行き始めているらしい。水着の時なんかははっきりわかる程度に胸元が膨らみ、ぼちっと乳首が浮かんでいたのを覚えている。

「あ……」

消しゴムを落したことを褒めてやりたい。

転がっていった先は千夏の足元。

やや肉付きの悪い足だが、短パンということもあり、色々と隙だらけ。恰好こそ少年じみているが、パンティはシルクの可愛らしいピンク色。無音でシャッターが切れるカメラがあればと思いつつ、すぐに立ち上がる。消しゴムを満に渡し、千夏を見る。

「萩さんは大丈夫かい？」

「はい、なんとか……」

彼女が顔を上げて隆を見る。ボーイッシュで遠目には少年と見間違えてしまいそうだが、唇、頬のふっくらとした感じ、睫毛と、可愛い子だった。そしてパンティも。

そのまま素通りし、別の女子の覗きポイントへ行く。

武則の隣へ行き、視線はその隣の澄子に向ける。

「……」

こいつをこの席にしたのは失敗だった。満とつるんでいるところを見ると同じぐらい馬鹿だと思っていたが、極端に不出来でもなく平均的な生徒。口を出すことも無く、あまり長居ができない。

せっかく今日はノースリーブで、運が良ければ横乳が見えるかと思ったのにと、移動する。

「先生、ここなんですけど……」

菱沼佳代が質問をしてきた。

「ああ、どれどれ……ここはだな……」

この子は良くも悪くも普通の子。

お嫁さんにするのであれば、この子のようなほつとする地味な子が良い。  
そんなことを思いながら質問に答えていた……。

\*\*\*

その日は三クラス合同で体育館での授業となった。器械体操として跳び箱、平均台、マット運動が行われる。徹はチビだが素早く瞬発力がある。そのおかげか、自分と同じくらいの跳び箱をひよいと超える。

対し昭は運動が苦手で、跳び箱もマット運動も苦手。

「おいデブ、お前本当に運動ダメだな」

健介が呆れた顔で言うが、当人は愛想笑いで濁す。

「せめて四段ぐらい飛ぼうぜ。ほら、ここで手をつけて……」

跳び箱を前にして両手を着かせる。まずはイメージをつけるためにと、ロイター板で軽く飛ぶ練習をさせる。

「うーん、難しいね」

「まま、最初は飛ぶイメージだけな。ここでこう手をつけて、このタイミングで飛べばいけるはずだ」

「ロイター板踏み壊すなよ」

笑いつつも練習に付き合う健介がずれたマットとロイター板を直す。

「転びそうになったらそのまま転べよ。無理すと足挫くからな」

「うん。わかった」

走り、言われた通りに踏み切り、手をつき、ジャンプする。

「お」

かなり不格好だが、跳び箱を超え、そのまま着地した……が、体重と慣性の法則のせいで前のめりになり倒れる。

「あーあ……。まあ、飛べたんだからよしとすつか」

「前途多難だな」

それでも最初の頃より進歩したと、昭は嬉しそうだった……。

跳び箱の隣でマット運動をする女子達。

佐原みなみは少しぼっちゃりした印象のある子。穏やかで笑うとえくぼの出来る可愛い子。おっとりしていて誰にでも優しいところがある。

やや垂れ目な瞳と、控えめな鼻下唇がふくらっていて肉感的。背が小さくおっぱいがそこそこ大きいせいもあり、太って見えるが、実際はおっぱいの大きさを恥ずかしがって猫背になっているためだ。

オシリも丸みがあり、デニムを穿くとぷりっとしたハート形を見せつける。最近はずの長いスカートを穿くようになっていて鑑賞できないが、椅子に座る時に隙があり、後の席の長峰慎吾が授業中、たまにスカートをめくり上げる。

■らしい可愛い動物の刺繍のついたパンティを見ては休み時間にからかい、彼女を真っ赤にさせる。

最近教員の佐伯豊のゲンコツが落ち影を潜めたが、代わりに彼女のお手伝いをして、隙を伺う男子が増えた。

たとえば彼女が掃除の時間にバケツを持つようとしていたら近づき、中腰の様子を見てから手伝う。チリトリをしてもらい、上から見下ろしたりと、そのふくらした身体付きの隙間を覗こうとエロ男子が頑張っていた。

今、前転の練習をする彼女を見ようと、男子の数人は平均台の練習をするふりをして、彼女を見ていた。

ころんと転がるうとするが、身体が固いせいか、足を開くことへの恥かしさがあるのか、上手くできない。

前のめりになっているせいで胸元が見えず、覗きの価値が薄くつまらなかった。

「なんだ、佐原は前転もできないのか？ 少し身体が固いんじゃないか？」  
豊が声を掛ける。

「はい。がんばってるんですが……」

真面目な彼女がさぼるはずもないのだが、できなことも事実。豊は彼女の背後に立つと、背中を押す。

「いいか、こうやって転がるんだ。先生が補助するからやってみよう」

「はい」

言われるままに転がるうとするみなみ。豊の手は彼女を転がそうと、背中を押していたが、それがオシリに回り、筋肉の薄い柔らかなオシリをむにゅつと揉む。

「……」

両手で弄るようにして押されると、みなみの身体がこわばる。

「ほら、もっと勢いよく」



そのままころんと転がることができたので、考え過ぎかと頭を振った。

「よしできたな。だが、まだちょっと身体が固いな。今野、佐原のストレッチ手伝ってやれ」

「はい？ あたしがですか」

平均台に上ろうとしていた真奈が呼び止められ、手招きされる。

「ああ。背中伸ばすやつだ。二人じゃないとできないからな」

背中伸ばしは背を向け合い、手を掴んで背負うストレッチ。二人一組で行うわけだが、普通は同じくらいの背丈の子で行う。

みなみと真奈では頭一個真奈が高く、ストレッチするにも不格好な気がした。

「さ、早く」

仕方なく真奈はみなみのストレッチに付き合うことにした。

みなみは隠れ巨乳。普段から猫背にしているせいで気付かない男子も多いが、授業中、上から見るとよくわかる。

彼女が猫背でいることを指摘し、背筋を伸ばさせたとき、分不相応なおっぱいの丘が見えた。

服越しとはいえ大人の豊の手で包み込めず、持て余すくらいの大きさがある。体育の時間は大きな目の体操着をゆったりと着ているからこれまでわからなかった。

何か理由を付けて体操着をズボンの中に入れさせ、ぴったりと身体のラインを浮き彫りにさせようと思っている。

その前にもっと手軽な方法があることを思い出す。

背中を伸ばすストレッチをさせれば、いくらゆったりした体操着でも、おっぱいの大きさが見えるはず。ついでに巨乳の真奈のおっぱいの丘も見たいと、彼女を指名した。

その目論見は当たった。

真奈の背中に背負われるみなみは、ふっくらしたおっぱいを天井に向けていた。

重力に従って少しへこむが、それでも潜在的に大きかったことが見て取れる。

運動不足でたるみが見えるが、太ももも柔らかそう。先ほどオシリを触った時も全然筋肉の固さが無く、手が沈み込むような心地よさがあった。

まだまだ成長の兆しがあり、いずれ体育の補習とかこつけて、じっくりと体をいじくり倒したい。

「よいしょ、よいしょ……」

「今野さん、私重くないですか？」

「へいきへいき、さ、今度はアタシの番ね」

みなみが真奈を背負うので、また二人を凝視する。

やはり真奈の方がおっぱいが大きく、張りもある。重力に逆らう生意気なおっぱいだ。

昔はチビでイジメられっ子で頭の痛い生徒だったが、最近は身体が大きくなり、それに比例して態度、おっぱい、おしりが大きくなった。性格はどこか影があるが、スタイルだけ生意気な優良生徒。

今は薄桃色のブラジャーをしているようで、少し透けている。何か理由を付けてブラジャーを外させたい。たとえば金属が危険だからとかそれらしい理由。

次の学年会議でそれとなく提案しよう。

器械運動で金属が絡まり怪我をする可能性がある。確かそんな事例もあったはずだ。ネット調べてプリントアウトすれば頭の固い舘脇真一もごまかせる。他の志垣隆や岩村勝行はロリコンの気があるから即領くだろう。面倒そうなのは体育バカの篠田信行と、女性教諭。健全な発達の為にブラジャーをなどとのたまうせいで、女子の胸の膨らみが遠のいた。代わりにブラジャーが透ける構図をいただけだから、ある意味プラスマイナスゼロ。

「よいし、次」



他にめぼしい発達をした女子は……。

\*\*\*

土曜日の昼下がり、徹は相模原駅近くの雑貨売り場にいた。

■学生を相手にした安物の化粧品や小物、ヌイグルミやアイドルのポスターが飾られたそこは、女子のたまり場といつてしかるべきもの。

徹としては非常に居づらい雰囲気であり、周りの子達も彼を見ては首を捻っていた。

「なあ、俺あっちで待っていい？」

「なんで？ 別にいいけど……」

彼がここにいる理由は一つ。真奈の買い物に付き合つてのこと。

駅近くのスーパーで特売のお好み焼きの粉、冷凍イカ、それにさくら海老の買い物に荷物持ちとしてかり出されたのだ。

現在その荷物を両手に抱えているわけで、できれば直ぐに帰りたいのだが、せっかく来たのだからと真奈はお店を見ていた。

百円ショップに並ぶような小物とそれほど代わり映えしないはずのそれが四百円、五百円と打ってあり、どれも眉唾物と徹は首を傾げてしまう。けれど、真奈はどれを取っても「これ可愛い、似合うかな？」などと女の子みたいなことを言う。

徹は適当に返すのもばかばかしくなり、近くのベンチにどかっと座る。その間も真奈は物見優山を続けていた。

幼馴染の真奈はどんどん背が高くなり、出てくるところが目立つようになってきた。

祐樹の話によれば「ブラ」をしているらしく、最近を着替えの時も胸元を気にするようにする素振りがある。

彼女も思春期を迎えているのだろうと感じると、目に見えて変化の無い自分に焦りを覚えたりもした。

—— あれ？

そんなことを考えていると、向かいのお店に見覚えのある子がいた。

—— 相原さん？

別段彼女を気にするつもりなど無いのだが、ショッピングモールという賑わいだ場所に彼女のような地味な子が一人で居ることに驚いて、そっと立ち上がっていた。

「相原さん」

「え？ あ、高杉君！」

背後からそっと声を掛けると奈々は驚いたように肩をびくつとさせ、手にしていたものを背中に隠す。

「何隠したの？」

「え？ あ、あの……これ……」

もともと隠す必要もないと、おずおずと差し出す奈々。彼女が手にしていたのはブルー

のリボンとホワイトチョコレートの詰まったチューブ。

「なにそれ？」

「えと、お菓子作るのに使うの。これでケーキとかクッキーに文字を書いたりするの」

「ああ、誕生日ケーキとかに使うやつね。へー。お菓子作りするんだ」

「う、うん……」

目を丸くした奈々はそっと視線を落とし、リボンをきゅっと掴んで皺にする。

「そのブルーのリボンもつけるの？ 誰かの誕生日とか？」

「んーん、そういうわけじゃないけど……」

だんだん言葉尻がか細くなる奈々に、徹は余計なことを言ったのかと内心舌を巻く。もともとそこまで仲が良いわけではない。

クラスも違うし、接点といえればせいぜい去年のバスケットボール部ぐらい。

何話掛けたかといえ、意外な彼女が意外な場所にいるのを珍しかったからという好奇心と、女子の輪の中での疎外感から抜け出したかったから。

自分の軽率さを反省しながら、この場を去る理由を探してしまう。

「ちよっと徹、どこ行ってるのよ」

すると渡りに船とすべきか、真奈が怒った風にやってくる。

「ああ、ゴメン。相原さんが居たからちよっとね……」

「あら、相原さん。こんにちは」

「今野さん。こんにちは。あの、二人で……デート？」

真奈を驚いて見る奈々は、早口でそう言うので、徹も真奈も真っ赤になって顔を振る。

「違う違う。こいつとデートなんてありえない。つか、こんなチビじゃあたしにつり合わないし、せいぜい弟かな？」

「よせやい。こんな大女、姉貴にしたってご愁傷様だったの。ただの買い物に付き合っただけだって……」

「そう……。でも、仲良さそうだったし……」

「いやいや、これは腐れ縁というか……ね？」

「まあ、そうかな？」

それ以外に上手い言葉が思いつかないのが二人の正直な関係。まだ■学生ということもあり、デートや彼氏彼女というもの自体理解できそうにない。

少なくとも徹はそう感じていたが、真奈は彼を伺うようにちらちらと見つめていた。

「そうなんだ。変なこと聞いてごめんね。それじゃあ私、用事あるから帰ります」

奈々はぺこりとお辞儀をすると、リボンとチューブのチョコレートを手にレジへと向かう。

「んじや、早く帰ろうぜ」

「う、うん……」

自分から招いたはずの状況からの開放にふうとため息を漏らす徹。帰り道、彼女が家庭



科部だということをやうやく思い出し、失言に頭を掻いていた。